

口頭発表時の質疑応答に対する
理工系留学生の意識と態度
—日本人学生との比較を通じた質的分析—

仁 科 浩 美

(山形大学大学院理工学研究科国際交流センター)

山形大学紀要（教育科学）第15巻第4号別刷

平成25年（2013）2月

口頭発表時の質疑応答に対する 理工系留学生の意識と態度 —日本人学生との比較を通じた質的分析—

仁科浩美

山形大学大学院理工学研究科国際交流センター

(平成24年10月1日受理)

要 旨

本稿は、口頭発表時における質疑応答に対する理工系外国人留学生の意識と態度について、日本人学生との比較を通し、PAC (Personal Attitude Construct 個人別態度) 分析により、「個」の特徴について質的に分析・検討したものである。その結果、同じ群である外国人留学生においても、意識・態度には多様性が見られ、日本語に関わる要因と専門の内容に関わる要因とを日本滞在の時間経過とともに段階的に切り離して捉えている事例や、回答の誤りに気がついたり、適切な回答ができないと判断すると、反論や質問の複雑化を恐れ、対話を「あきらめ」、切り上げる態度を示す事例などが見られた。日本人学生との比較においては、教員の存在に発言を遠慮・躊躇したりする点と、わかりやすい説明を行なうことの難しさを挙げた点で共通するものがあつた。他方、留学生独自の特徴としては、質疑応答の受容・産出に対する一定の日本語力や、動転に伴う日本語の忘却や方言の聞き取りへの対応力等、日本語に関して意識・態度が示されている点と、研究に対する社会的関与への意識が特に見られない点が挙げられた。

1. はじめに

公の場において自分の考えを他者に伝え、説得する口頭発表、いわゆる「プレゼン」は、学生・社会人を問わず、グローバル化と情報化が進む今日、重要度が増しているコミュニケーション活動である。大学においても口頭発表は、ゼミや報告会をはじめとし、卒業論文発表や学会発表等、勉学・研究において必須の活動である。外国人留学生の場合、発表を英語で行ってもかまわないとされる傾向が高まる一方で、卒業後日本企業への就職を希望する学生においては、日本語による口頭発表能力や討論する能力等、日本人と同等レベルの高度な日本語力が求められる。一般に、発表そのものについては一方向の発信であるため事前の練習で修正・改善することが可能で、ある程度発表者自身も納得いく形で終えることができるが、その後の質疑応答は発表者と質問者との相互行為となるためか苦手とする者が多い。特に留学生の場合は、内容面と日本語との二つの面で日本人学生を上回る難しさがあることが想像される。

そこで、本研究では、留学生がどのような意識・態度で質疑応答という時間を捉えているのか、どのような点に難しさを感じているかを明らかにすることを目的とし、大学院博

士前期課程において二年間の研究生生活を送った留学生について、日本人学生の事例を比較しながら分析・検討する。調査は、量的な調査により外国人留学生の平均的な姿・傾向を求めるものではなく、実存する個人に深く焦点をあて、留学生がどのような意識・態度を持っているのかを質的に分析する。個人の態度や意識をより深層的に把握することは、人間の複雑な思考に丁寧に向き合う上で必要であり、実像を具体的に捉えることにより多様な例を起り得る現実の幅として蓄積することができる。限られたデータ数からそれをもって全てを語ることはできないが、量的調査では得られない知見が期待される。

2. 質疑応答時間の特徴

質疑応答には様々な状況が考えられるが、一般に共通する特徴には以下のような点が挙げられる。

(1) 公的性

私的な行為としてではなく、公的な場での行為である。

(2) 場に存在する者

発表者、質問者、そして、その質問については発言はせず聞き役となる者、すなわち傍観的な存在となる聴衆、そして、会を進行する司会進行役の4者からなる。

(3) 質疑応答の成立に関わる者

発表者と質問者の二者からなり、基本的には1対1の二者間で行なわれる。聴衆は通常、発表者と聞き手とのインタラクションを傍観する者となることが多いが、先の質問を踏まえ、一つの質問をめぐる中で傍観者から質問者になる場合もある。すなわち、当該質問に全く関わることない傍観者である場合もあるが、内容によっては質問者にもなりうるという流動的な存在である。また、その場合、コミュニケーションの規模は、1対1の対人コミュニケーションから小集団コミュニケーション¹⁾に展開していることになる。

(4) 聴衆の知識

聴衆は、不特定多数であり、その話題に関心のある者が参加していることが多いが、その背景知識の範囲・熟知度は一様ではない。

(5) 時間制限

発表にも質疑応答にも時間制限があり、質疑応答の時間は、一般に、20分の発表であれば10分程度と比較的短い。

(6) 資料

発表の内容に関する配布資料、スライド、現物等がその場にあり、それに関する質問がなされることも多い。

上記のような条件下での類似したコミュニケーション形態としては、討論が考えられるが、場に存在する者の関わり方、及び、時間制限の点で、質疑応答とは異なるものである。

3. 先行研究

日本語での口頭発表能力に関する先行研究には、母語話者を対象にした発表自体の挿入注釈や言語表現を取り上げた研究^{2),3)}や、留学生が発表で用いた語彙・表現を分析した研

究⁴⁾があるが、質疑応答に目を向けたものはわずかである⁵⁾⁻⁷⁾。パイロットスタディとして筆者が実施した理工系を専門とする日本人大学院生を対象にした調査⁶⁾では、実際に大学院生が発表した質疑応答場面について「うまくいかなかった」点を分析し、その要因が(1)情報の受信と発信に関する要因、(2)機器の操作に関する要因、(3)心理面に起因する身体的要因の3点にあることを報告した。さらに、(1)については a. キーワードへの過敏な反応や、関連質問の想起による誤解や勘違い、 b. 未知の言葉を質問者が用いたことによる困惑、 c. 話題に対する理解や認識に質問者とズレがあるという困惑、 d. 質問者の意図を十分に理解できぬままの不明確な返答、 e. 簡潔にまとめられない説明、の5つの下位項目を得た。しかしながら、留学生についての同様の調査・分析はまだ行なわれておらず、また、同研究は発表学生が質疑応答に対し、どのような意識・態度を持っているかを調査したものでもない。金(2006)は、質疑応答が発表者の側には自己の思考の論拠確認や、他者の新しい視点からの疑問や助言への対応能力が養われる有益な場であることを挙げ、外国人留学生対象の授業の中での取り組みを報告しているが、日本語の授業という枠からは出ていない。現状では、言語研究に関わる者が他の専門分野の協力者の了承・協力を得た上で、データ収集を行わねばならないという難しさもあってか、実際の専門分野場面における質疑応答に関するデータ分析は管見の限り少ない。

4. 調査の概要

4. 1 調査協力者

調査協力者(以下、協力者)は、外国人留学生F1、F2と、日本人学生J1、J2で、全員、東北地方の理工系大学院博士前期課程2年に在籍する男子学生である。日本人学生については、外国人留学生の特徴をより明確に理解するため、比較データとして扱う。調査は、修士論文発表会を終えた課程修了直前の2012年3月に行った。詳細を表1に示す。

F1は、来日2年半の韓国出身の留学生である。来日して半年、研究生として過ごした後、博士前期課程に入学した。日常の研究室での活動は日本語で行なっている。学外での日本語による発表は全国規模の学会で一度行なった経験がある。F2は、来日6年目、マレーシア出身で学部1年から日本で大学生活を過ごしている。F2もF1同様、日常にお

表1 調査協力者の内訳

	出身国	来日年数	研究活動での主たる言語	学外での日本語による発表回数
F1	韓国	2年半	日本語	全国大会 1
F2	マレーシア	6年	日本語	地方大会 1
J1	日本	—	日本語	地方大会 2 全国大会 2
J2	日本	—	日本語	地方大会 1 全国大会 1

ける研究活動は日本語で行なっている。日本人学生J1は、学外での発表経験は地方大会2回、全国規模の大会2回であり、J2は地方大会1回、全国規模の大会が1回であった。

4. 2 分析方法

分析は、「個」の特質について、多変量解析による客観的分析手法を加え、協力者自身の解釈から分析するPAC（Personal Attitude Construct 個人別態度）分析⁸⁾を用いる。この手法は、近年、特に社会心理学、臨床心理学や教育等の分野において、「個」に対するアプローチ法として注目されているものである。この分析法を選択した理由は、統計的処理と協力者による解釈が入ることにより、研究者による主観的な分析を軽減・回避することができるからである。

PAC分析の手続きは、以下のように進めた。

- ① 協力者は、筆者が提示した質問に関して連想したことを順にカードに書く。協力者に教示した文章は、以下のとおりである。

「あなたは口頭発表の質疑応答の時間、どのような場面で難しさを感じたり、困ったりしやすいでしょうか。そして、難しさを感じたり、困ったりしたとき、どんなことを考えたり感じたりしますか。また、そのとき、どんな行動をすることが多いでしょうか。頭に浮かんできたイメージや言葉を、思い浮かんだ順に番号をつけてカードに記入してください。」

- ② ①のカードを重要度順に並べ替える。
- ③ 協力者は記入したカード二者間の類似度（1～7）を評定する。
- ④ 統計分析ソフトHALBAU7を用い、重要度と類似度距離行列によるクラスター分析（ウォード法）を行い、デンドログラム（樹状図）を作成
- ⑤ 協力者にデンドログラムについて、クラスターや全体のイメージの解釈、各項目のイメージ（プラス、マイナス、どちらともいえない）を求める。
- ⑥ 筆者が総合的に解釈する。

3. 結果と考察

本章では、外国人の事例、次に日本人学生の事例の順に分析結果と考察を述べる。それぞれの事例については、まず各協力者のクラスター分析の結果を示した後、それについての協力者本人によるクラスター解釈、続いて筆者による総合的な解釈を述べる。最後に、それぞれの事例について意識と態度の特徴をまとめる。協力者のクラスター解釈の発話をそのまま記載するのは、これが量的データの数値結果に相当する、質的データの中核をなす情報であり、協力者の発話を注意深く分析することで個人の思考のあり方を知ることができるからである。

3. 1 外国人留学生の事例

3. 1. 1 外国人留学生F1

上記手続き①の結果、F1は全部で10枚のカードを作成した。図1にF1のクラスター分析の結果を示す。図の左の数字は協力者が挙げた重要順位を、()の符号+、-、0は、順に、そのカードの項目の単独でのイメージ「プラス」、「マイナス」、「どちらでもない」を表す。重要順位が高い項目について上位3項目を見ると、「質問の内容じゃなくて、

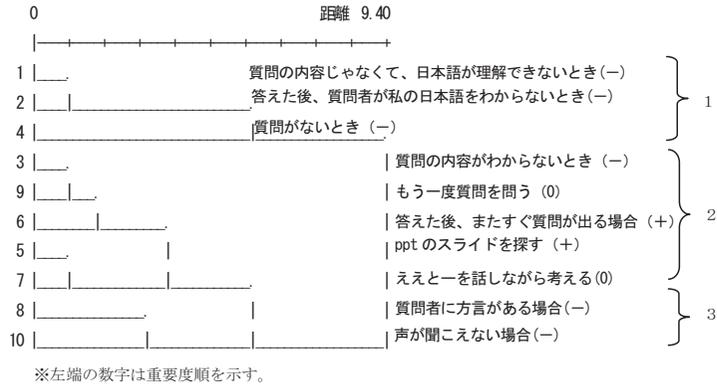


図1 F1のデンドログラム(樹状図)

日本語の理解ができないとき」「答えた後、質問者が私の日本語をわからないとき」「質問の内容がわからないとき」と、自らの日本語に関わる事柄と、日本語の理解ではなく質問の内容が理解できない場合を重視していることが示唆される。

また、各項目の単独でのイメージは、プラスが2、マイナスが8であり、プラスはどちらもクラスター2にある。

F1自身によるクラスター解釈：

クラスターは、デンドログラムと協力者のクラスターに対する項目の認識から、3つに分けるのが適当であると判断した。以下に、3つのクラスターごとの留学生F1自身による解釈を【 】に示す。なお、()は筆者による補足。[]は筆者による協力者への質問を示す。

クラスター1は、「質問の内容ではなく、日本語の理解ができないとき」～「質問がない場合」までの3項目：【これ全部は、ええと、日本語がわかんない場合ですよ。1番は質問の日本語を理解できない。で、私の日本語が、日本語の能力が不足で、理解ができない、じゃないかと思って、「答えた後、質問者が私の日本語をわからないとき」も私が話すことが、日本語が下手なんで、よくわかんない、とか。あと、「質問がない場合」は発表するときに私の日本語が下手で、ちゃんと内容がわかんないんじゃないか、それを考えて、これを書いたんですよ。で、全部、私の日本語の原因じゃないかと。(略)最初あったんですよ。研究室の中で1年生のときは1か月1回くらい発表、データの報告会と、また論文の読解あったんで、そのとき、これ、3つは結構あったんですよ。】

クラスター2は、「質問が内容がわからない場合」～「えーとーを話しながら考える」までの5項目：【これは日本語じゃなくて、内容がわかんない。これは、専門の分野、で、私の専門の分野でこれは全部なんですけど、ま、これは全部、なんか説明する準備とか、答える準備とかをやりながら、スライド探すとか、「えーと」とか、日本人でも結構あるんです、「えーとー」とか。で、また私の専門の勉強が足りないんじゃないか、と考えるんですよ。】

クラスター3は、「質問者に方言がある場合」と「声が聞こえない場合」の2項目：【「方言がある」の場合は、日本語のせいだと思うんで。また、「(声)が聞こえない」の場合は

ただ雰囲気（会場の環境）ですよ、質問者の声が小さい。たぶんこれ（「方言がある」「声が聞こえない」）は、私が自信持っている（持った）後の場合ですよ。なんか、結構、日本語わかるんですけど、方言とか、私はわかるんですけど、ただ（声が小さくて）聞こえない。こういう感じ。まだ日本語が下手なんですけど、ええと、だいたいわかるぐらいのときに、こんな問題があったんです。】

クラスター間の比較：

クラスター1とクラスター2【同じところはないですよ。これは完全に日本語のせい。これはほぼ専門の勉強のせい。〔色に例えると何色ですか。〕色に例えると、黒ですね。なんか早く終わりたい。何も見えないという感じ。緊張して、何も見えない、何も聞こえない。日本語がわかんないときは本当にそう。発表しながらわかるじゃないですか。発表のときに、練習するんですけど、全然日本語覚えてないし。発表しながら、私が作ったスライドなんですけど、「え、これ、スライド何？」って、えへへ。説明どうするかとかそういうことあるんで。（違いは）これ（クラスター1）は来たばかり。1年、1年半。まだあるんですけど。来たばかりから1年ぐらい一番多かった。専門の内容じゃなくて、日本語がわかんない。】

クラスター2とクラスター3【なんか、これ（クラスター2）は今の問題、これ（クラスター3）は後の問題。今勉強することはこっち（クラスター2）、後もっと勉強することは専門的なこと。これ（クラスター2）は専門的なところだから、勉強していけばもっと高まって。で、またこれ（クラスター3）は日本語の方言とかは、ま、また勉強しなければわかんないじゃないですか。大阪人が大阪弁を良く使う単語くらいは、聞こえたら、あ、これ大阪弁だとわかるぐらいになりたい。別に勉強することじゃなくて。（略）同じところはないですね。】

クラスター3とクラスター1【同じところは、日本語、勉強しなければダメ。「声が聞こえない」はしょうがない。もう一度問うしかないんじゃないですか。】

クラスターを連想する色を尋ねたのは、カードに記述された文言や各クラスターに対する解釈がイメージというより具体的な行動が多く述べられたため、より抽象度の高いイメージを引き出すべく、連想する色を述べてもらった。この質問は分析者（筆者）及び協力者にとってイメージを共有するのに非常に有用であったため、必要に応じ留学生協力者に用いた。

筆者によるF1についての総合的解釈：

クラスター1では、質問の内容ではなく、本人の日本語そのものに問題があり、相手の言っていることが理解できない、本人が回答したことが質問者には理解できないといったインタラクションが成立しない場面が意識されている。「質問がないとき」について、F1には質疑応答時の沈黙が続く時間がイメージされていると思われるが、その原因は自己の日本語が聴衆に理解されず、発表内容が伝達されていないためと解釈している。すなわち、日本語が下手なことが、聴衆が質問するに至る情報を十分提供できていないからと考えていることがわかる。これは、自身の日本語力不足による質疑応答の混迷を表しており、「日本語力の不足に起因する困惑」を示していると思われる。来日して間もない時期が強くイメージされており、日本語ができないことには、発表においてなす術がなく、本人が言うように「何も見えない」暗い「黒」をイメージする闇の状況であった言えよう。

クラスター2では、日本語の問題は解決された上での専門的な内容に関する、応答時の態度が述べられている。各項目についてのイメージでは、クラスター2のみにプラスが見られるが、「pptのスライドを探す」は、質問を予想しスライドを準備していたことを表すのでプラス、「答えたあと、また質問が出る場合」は、説明を理解してくれたから次の質問につながったと解釈してプラスとしており、自分が聞き手の疑問に反応でき、インタラクションが成立した場合を肯定的に評価していることがわかる。質問に対する回答を準備している場合、即答できず考える時間を要する場合、質問の内容的な意味が理解できない場合の行動が示されている。クラスター2は「専門の内容に対する回答の態度」と名づけることができよう。

クラスター3は、方言による質問と質問者の声が小さくて聞こえない状況が示されている。質問を受ける側にはいかんともしい難いものであるが、方言については、「別に勉強するものではない」が方言なのか共通語なのか、聞いて区別がつくぐらいにはなりたいと、焦らずに、しかし、いずれできるようになれば良いと力まずに受け止めている。東北地方で学ぶF1の口から方言の具体例として東北弁ではなく、「大阪弁」が出現した理由は、研究室の教員が関西出身であることや、学会等でも関西弁をよく耳にする機会があること等が推測される。また、声が小さい質問者には、「もう一度聞くしかない」とし、自分ができる範囲で対応することを考えている。クラスター3は「多様な質問状況に対する対応」が示されている。

全体として、F1の場合、日本語での対応と専門内容を受けての態度に主眼があり、かなり明確に2つに分類されている。時間が経つにつれて、本人の中では日本語がわからなくて反応できず苦痛を感じる状況は次第に解決しつつあり、専門的な内容へと困難点が移行しているという確信がうかがえる。本人も各クラスターの現象が起こった時期について言及しているように、質疑応答における困難点が2年の間の時間経過とともに段階的に変化していく様子が見える。そして、方言や小声で声が聞こえないといった質問者の多様性にも経験を通して気がつき、毎回起こるわけではない、副次的な問題にはあまり身構えず柔軟な姿勢で対応し、頻度が高い方言は聞いてわかるぐらいにはなりたいと、冷静に捉えている。

3. 1. 2 外国人留学生F2

F2は17枚のカードを作成した。図2にF2のクラスター分析の結果を示す。

重要順位が高い項目について上から1/3までを見ると、「その質問に対して、この分野の人はわかるはずなのに私は知らない。答えられない」「質問の答えはわかるのに、説明する流れが頭の中で混乱している」「先生の質問の意味がわからないときは一番困る」「いい文章を考えながら話すのは難しい」「日本語が出てこなくて、後は正しい言葉が思い浮かばない」となる。専門知識の有無、ツールとなる日本語を介しての説明の難しさ、質問が理解不能である時の対応等、専門知識の有無、日本語での説明、聞き手への対応に苦慮する姿が窺える。

また、各項目の単独でのイメージは、プラスが6つ、マイナスが11で、分からない質問に対して「あきらめる」とする態度をプラスに捉えている点が注目される。

協力者F2によるクラスター解釈：

クラスター1は、「質問の答えはわかるのに、説明する流れが頭の中で混乱している」か

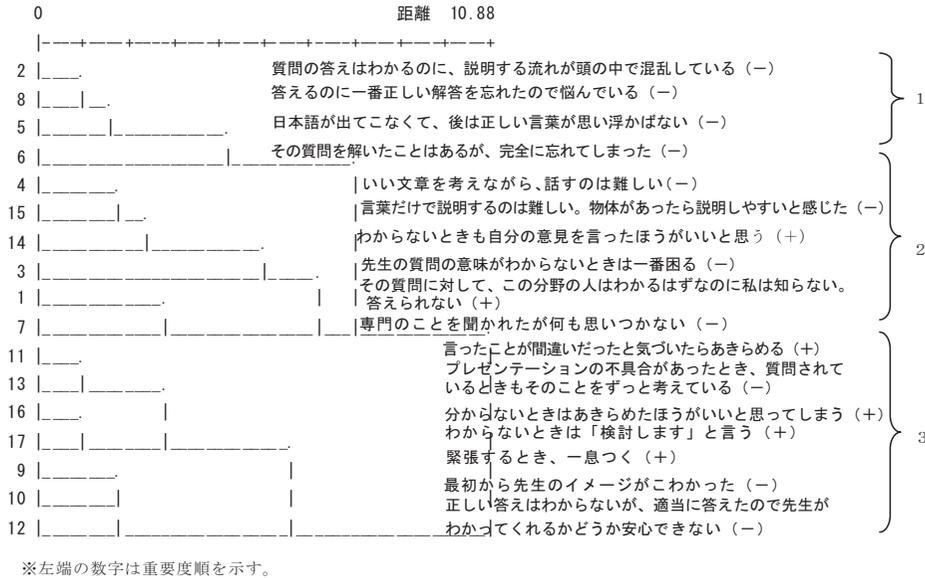


図2 F2のデンドログラム (樹状図)

ら「その質問を解いたことはあるが、完全に忘れてしまった」までの4項目：【ええと、グループ (クラスターの意味、以下同) 1のイメージは、ええと、発表するときに毎回失敗したけど、ええと、でもそのときに頭が真っ白になって、ええと、なんか他のことを考えて、今話していること (を) 忘れてしまう、というイメージがあります。そして、ええと、なんか、あの一、例えば、その発表討論に、あの一、話していることが、話していることと、考えていることと、迷ってしまうので、だから、あの一、混乱が出ます。[思いつく単語は何かありますか] ええと、何か「混乱」という言葉が出てきます。】

F2にもイメージする色を尋ねたところ、【グループ1の色は、「真っ白い」色のイメージをします。白いというイメージはたくさんのことを迷ってしまつて、頭が真っ白になって、何を話したらいいのかは、わからなくなってしまいました。だから、あの一、その一、イメージは白いついていうイメージは、よくないイメージがします。クリアなホワイトじゃなくて、なんか白いというのは、例えば、白い紙とか、ええと、なんか、あの一、白いボードとか、何も書いてないホワイトボードのイメージがあります。意見はたくさんあつて、頭は空になってしまいました。】

クラスター2は、「いい文章を考えながら話すのは難しい」～「専門のことを聞かれたが何も思いつかない」までの6項目：【ええと、グループ2のイメージはたぶん自分のせいと思えますけど、私も話すことが苦手なんで、いい文章を考えながら話すのは難しいと思えます。で、それだけじゃなくて、ええと、あの一、例えば、あの一、ま、話すことは苦手ですが、でも、あの一、言いたいことがあつて、ええと、だからあの一自分の意見とか、あの一、できれば何でもあの一、なんでも話したいという気持ちがあります。[言葉一つで言ったらどうなりますか] 話し方。グループ2の色は、ええと、赤いです。なぜかという、あの一、話すことは難しいんで、あの一、できれば、ええと、何をあの一話したいか、話し方

を自分でこう伝えると考えています。なぜ赤という赤は「目立つ」で、ええと、あの話したとき自信を持つように、なんか、話し方で目立ちたいなあと思っています。】

クラスター3は、「言ったことが間違いだったと気づいたらあきらめる」～「正しい答えはわからないが、適当に答えたので先生がわかってくれるかどうか安心できない」までの7項目：【グループ3のイメージは、なんかええと、あきらめるイメージがあって、例えば、質問に答えられないときは、緊張してしまって、あのう、適当な答えを答えてしまうイメージがします。そして、あのう、毎回、あのう発表の練習をしました。練習するときに、あのう、例えば、いろいろな質問されて緊張になってしまうんだけど、わからないことがあったら、もうあきらめるという気持ちが強いです。それはイメージだと思います。〔あきらめることはいいことですか〕ええと、グループ3の「あきらめる」というイメージはポジティブなイメージです。適当な答えを答えてしまうときは、ええと、悪いことになってしまうので、だからわからないことにあきらめたほうが良いと思います。】

グループ3からイメージされる色については、【グループ3の色は、あきらめるという言葉があって、グレーにします。グレーの色は中途半端というイメージで、グレーというのは、白か黒か、分別しにくいので、グレーにしました。】と答えた。

そして、「あきらめる」を使った項目がクラスター2とクラスター3に見られたため、クラスター2「わからないときもあきらめないで自分の意見を言ったほうが良い」と、クラスター3の「言ったことが間違いだったと気づいたらあきらめる」の違いについて補足を求めたところ、【グループ2のは、意見ですね。なんか最後の言葉に、あまりわからないですけど、例えば「そのようにやったら結果が出ると思います」ということばをつけたら、いいと思います。（答えが）わからないときは、意見だけを言います。答えは言わないほうが良いと思います。グループ3の「わからないとき」というのは、例えば、専門的な、ええと、例えば、細かく質問されて、で、あのう、あれは、わからないとたぶん悪い影響に、たぶんいい結果は悪くなるから、だから変な答えを言わないであきらめたほうが良いと思います。】と答えた。

クラスター間の比較：

クラスター1とクラスター2—【共通点と言うのは両方とも「混乱します」。グループ1のほうは考えて答えを話します。グループ2のほうは話し方が悪くて話せないということです。だから、考えながら話すのが難しいというのが共通点です。で、違うところは、ええと、グループ1のほうは、頭が混乱していて話せなくなると思います。でも、グループ2はもういろいろなことを、あのう、考えて、途中で話してて、その文章が終わらないというのが最適な言葉が出ないので、だから、あの、話し方があのう、グループ2のほう話し方が悪いと思います。】

クラスター2とクラスター3—【違うところは、グループ2が考えて、また話したいです。しかし、グループ3というのは話すのがあきらめてじゃ、「検討します」とかあきらめるというところがあります。】

クラスター3とクラスター1—【グループ1のほうは情報がいっぱい入っていて話すだけです。グループ3は頭の中に情報とかアイデアはなくて、あっても間違っているかもしれないので、ええと、グループ3のほうは「あきらめたほうが良いんじゃないか」と思っています。】

筆者によるF2についての総合的解釈：

クラスター1は、「質問の答えはわかるのに、説明する流れが混乱している」「日本語が出てこない」「その質問を解いたことはあるが、完全に忘れてしまった」等、回答時、適切な回答が何も浮かばず、頭が真っ白で動揺し、硬直する態度が示されている。それは、日本語と専門的な理解の両方に関与するものであるが、「質問の答えはわかるのに」「その問題を解いたことはある」「一番正しい回答を忘れた」等、初めて回答する質問ではなく、本来であればできるはずであるのに、できない、忘れたという悔やむ気持ちも感じられる。クラスター1は「適切に反応できず動転する態度」を示していると言えよう。

クラスター2は、何をどう説明すると良いかということに注意が置かれ、「いい文章」「物体があったら説明しやすい」と、聞き手にわかりやすい説明のし方に意識が及んでいる。聞き手が質問した場合、その答えがわからず質問に正面から対応できない場合でも、自分が思うところや意見は述べるのが大事であると考えている。この考えは本人が連想した色「赤」にも表れており、質問者が求める適切な情報が提供できなくても、その現象をどうみるかといった面から、自信を持って意見を述べることで研究への自己の存在を示すことを「目立つ」としているように考えられる。クラスター2は「説得力のある説明の模索と、意見表明への意欲」を示している。

クラスター3は、「言ったことが間違いだったと気づいたらあきらめる」「分からないときはあきらめたほうがいい」等、回答に不備があると気づいた場合や、専門的な内容に対する明確な説明が提示できず当惑しているとき、より混沌とした状況に陥るのを避けようと質疑応答を切り上げる「あきらめる」という態度が述べられている。「不要な混乱回避のための応答態度」と名づけることができよう。本人の中では、質問の答えがわからないときには、無理に答えを探して説明したりせず、「検討します」を用いて終結させる方法はプラスであると肯定的に受け止められている。これは、理解していないこと、あるいは、不備や未解決部分については、「適当な答え」で無理に繕ったりせず、素直に認める態度を示しているとも解釈できる。しかし、実際に、F2の口頭発表を筆者が参与観察した際、質問者が図の見かたについて説明を求めた場面に遭遇したが、F2は早々に「今後の検討課題とします」というような反応を示した。追究されそうな気配を感じると、「検討します」を用い、対話を遮断してしまう態度も見られ、適切な使用という面からはまだ課題があるように思われる。

全体として、自己からの発信に注意が置かれており、クラスターは、質問に対して答えられない動揺した状況と、回答可能な点についてはいかに自分の考えを積極的に伝えるかという意識、そして、回答困難と判断した際の態度から構成されていると言える。回答時の態度については、質問者が欲しい情報そのものには答えられない場合でも、質問に関する自分の意見・考えは述べようとする意欲的な面がある。しかし、その一方、「専門的な、ええと、例えば、細かく質問されて、で、あのお、あれは、わからないとたぶん悪い影響に、たぶんいい結果は悪くなるから」と、質問者がさらに欲しい情報について追究してきた場合には、問題が複雑化して答えられなくなるとの不安から、早急に切り上げるのが賢明であると考えている面もある。過剰な切り上げは、質問者側からすると、急な幕引きに見える場合も考えられ、F2と質問者との質疑に対する満足度には差がある可能性も否定できない。

3. 1. 3 外国人留学生F1及びF2のまとめ

F1は、研究室での初期は日本語の理解・説明力の欠如を感じていたが、徐々に、日本語の問題から専門的な内容に対する質問への対応へと移ってきたことを実感している。さらに、経験を積むにつれて発表会場の違いによる環境への多様な対応力の必要性にも意識を向けている。F1については、質疑応答に関する困難点を、来日時からの時間軸と照らし合わせて、まず日本語の問題、次に専門の内容に関わる問題と、2つを切り離して捉えている点が特徴的である。また、聴衆の反応に関心を向け、「質問がない」という聴衆の反応は自分が研究内容を十分に伝えられていないことにあるとするのも特筆すべき点であり、質疑応答が聞き手と話し手とにより成立することを十分意識していることが感じられる。

一方、F2の特徴は、自らの産出に関する項目が多く、言葉を発する前の情報整理の難しさ、説明時の的確な表現の模索といった言語面での苦戦が意識の多くを占めている。また、質問に対して分からないときには、安易に回答して、次の質問をより専門化・複雑化させ、結果的に質疑応答を困窮させてしまうようなことはせず、自ら「あきらめる」という態度で質疑応答を打ち切る点が特徴的である。しかも、その回答困難の判断は、「言った事が間違いだと気がついたらあきらめる」「わからないことがあったらあきらめたほうがいい」とかなり早急になされる印象を受ける。しかし、一方で質問への正解、すなわち、的確な回答というべきものがわからなくても、自分の推測や予想等の意見・考えを言うことはすべきであると、意見表明には自己の存在表明の一つとしての価値を見出している。しかし、それが質問の本題でない場合には、質問者にとっては的外れな回答と映りかねない。

また、専門的な内容に関する質疑応答については、F1が言語と切り離して捉え、日本語が分かれば専門的な内容に対応できるという捉え方をしているのに対し、F2は専門的な内容を日本語で適切に表現することの難しさを述べており、F1ほど日本語と専門内容を分離して捉えてはいない。これは、日本語による説明力の自信と、専門の内容に関する理解への自信との二つの要因が関係していると思われ、F1にとってはこの二つは時間の経過に伴う成長により全く異なるものとして意識されているが、F2にとっては時間では区切れない複雑に絡んだ問題となっていることがわかる。また、難しさをどこに感じるか、各自が意識する点についても、F1は相手の反応に対してより敏感に反応したのに対し、F2は自らの説明力に問題意識を感じている点にも違いが見られた。

3. 3 日本人学生の事例

3. 3. 1 日本人学生J1

J1は全部で11のカードを作成した。図3にJ1のクラスター分析の結果を示す。

重要順位が高い順に1/3までの項目に注目すると、「想定外の質問には困る」「発表スライドがないにもかかわらず探す」「簡単な質問も自分の中で難しくしてしまう」「制限時間があるのが難しい。もっと時間があれば」となり、質問に対する自らの回答を意識している。

また、全項目の単独でのイメージをみると、プラスが3、マイナスが8であった。以下にJ1自身による解釈を示す。

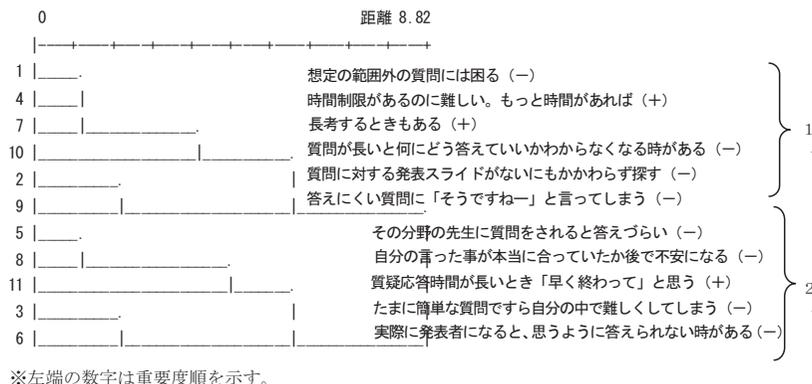


図3 J1のデンドログラム (樹状図)

J1によるクラスター解釈：

クラスター1は、「想定外の質問には困る」～「答えにくい質問には『そうですね～』と答える」までの6項目：【難しいですね。ええと…。困るっていう、困るっていうのが一番最初に出ますね。どうしようかなって、いう感じですかね。質問を受けて、どうすっかな…みたいな。どうしようかなっていう、どう答えようかなって。余裕がないわけじゃないんですよ、その発表の時間っていうのは、冷静なんですけど、それこそ、冷静だからこそ、変に考えちゃうみたいな感じですかね。すみません、ほんと何言ってんだか。】と答えた。

また、プラスのイメージとした、「時間制限があるのに、難しい。もっと時間があれば」については、「これはたぶん時間があれば答えられるような。時間があればちゃんと答えられるイメージなので。」「長考するときもある」は「ちゃんと考えてるといっつか。考えられる余裕がある」と回答した。

クラスター2は、「その分野の先生に質問されると、答えづらい」～「実際に発表者になるとうまく答えられないときがある」の5項目：【全体的に、答える内容、答え方とかどう言っているかかっていうのが全体的になんか不安というのが共通していますね。】

また、「その分野の先生に質問されると答えづらい」について説明の補足を求めると、「(先生に) 言われると、果たして俺が今言おうとしているのは正しいのかみたいな。学会とかだと自分がやって自分が発表することが正しくなるじゃないですか。あんまり素人っていうか、あんまり知らない人にとっては、自分が言ったことが真実になるじゃないですか。これ、専門の先生に対してはよりですけど、普通の人に対しても「これ、合ってるのか」っていうのがありますね。」と答えた。

プラスのイメージとした「質疑応答時間が長いとき、「早く終わって」と思う」については、「いっぱい質問が来ていることを考えると(苦笑)、発表としては、んん、どうなんすかね…ん、これは、今言った印象からも、プラスで」と答えた。

クラスター間の比較：

【クラスター1はどうか答えていかわからない、言う前の段階で、クラスター2は言っている最中って言いますか、言った後もですけど。(両方に共通することは)あの(発表の)場所に、みんなの前に立つと適当なこと言えないので、時間内にまとめようとするんですけ

ど、うまく、まとまらず、けど、言おうとするので、何言ってるのかわかんなくなっちゃって。黙っている時間は極力避けたいんで。(相違点は) クラスター1は質問が来てすぐ、前に感じるイメージ。これ(クラスター2)は質問言っている最中とか、やった後のイメージですね。質問のほう、一人で終わるわけにもいかないの、時間長けりゃいいなと、矛盾してますけど。】

筆者による日本人学生J1についての総合的解釈：

クラスター1は、想定外な質問や簡潔でない質問に対応する態度を述べており、「回答前の質問の受け止め態度」が表されている。長く考え込んでしまったり、定められた時間の中で考えをまとめて対応するのに苦慮している様子がうかがえる。しかし、もっと時間があれば適切な対応ができ、冷静ではあると、回答は全く不可能というわけではないとプラスの項目として受け止めている部分もある。

クラスター2は回答時、または、回答後の意識が取り上げられており、自分の言ったことが適切な回答になっているのか、誤った情報を提供していないか、自分と同じ研究者の存在を気にしながら、一人の研究発表者として発言内容に責任を持たなければならないというプレッシャーを感じつつ説明を行なう態度が見える。考え込むあまり、「簡単な質問でも自分の中で難しく考えたりしてしまう」のであろう。また、その時間に耐え切れず、「早く終わって」との気持ちも生ずるが、質問が途切れず来るということは、聴衆に興味を持ってもらえたことであるとの肯定的な解釈も持っている。このクラスターは「責任ある回答への不安」とまとめることができよう。

全体として、J1のクラスターは質問を受けたときの反応と、周囲のプレッシャーを感じながらの返答時の意識から構成されている。時間内に的確に答えることの難しさや、即答できずに考え込んでしまうこと等、まだ十分に対応できない部分もあるが、質疑応答が続びき、「早く終わって」と思いながらも、質疑応答のあり方としては質問がない場合より非常に好ましい状況であることも理解している。また、研究への社会的責任といった点にも気づいている分、回答が慎重になっている可能性も感じられる。

3. 2. 2 日本人学生J2

J2は全部で14のカードを作成した。図4にJ2のクラスター分析の結果を示す。

重要順位が高い1/3の項目に注目すると、「先生に聞き返すことがある」「考えながら助言を待つ」「時間稼ぎ」「笑ってごまかしてしまう」となり、答えに困り他者に依存するあいまいな態度をとる姿が感じられる。

また、全項目の単独でのイメージをみると、プラス、マイナスともに7であるが、プラスは重要順位が高く、かつ、クラスター1に集中している。プラスと評価した7項目の理由について、J2は「自分にとってマイナスにはならない。質問の時間が短くなるし、助言をもらえるし、っていうところですかね。」と述べた。

J2によるクラスター解釈：

クラスター1は、「先生に聞き返すことがある」～「なんとなくこれかなって答えが浮かんでも確実じゃなきゃ言えない」までの6項目：【学会とかの発表じゃなくて、研究室とか、学校の、修論の発表とか、卒研の発表だと思います。相手が教授という知識を持っている人っていうイメージがあります、この内容ですと。わかんない質問されたときに、どうしようもないので、「先生はどう思いますか」と聞くとか。「考えながら助言を待

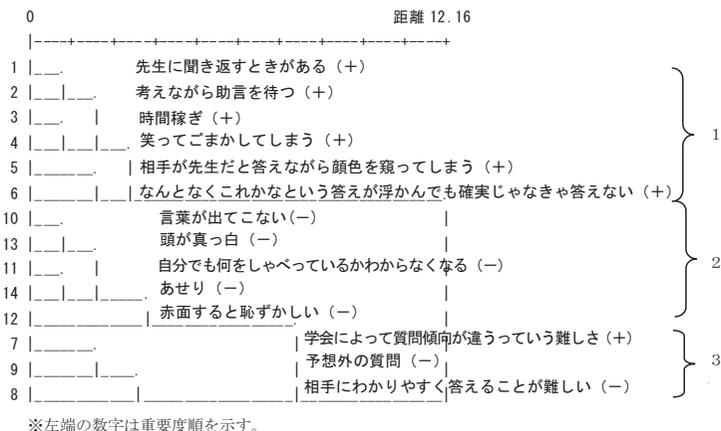


図4 J2のデンドログラム (樹状図)

つ」というのも似ていて、わかんないんですけど、一応、考えているふりをしていて、「そういうことだろう」みたいなことを言ってもらえて、あと「笑ってごまかす」もたぶんそうですね。「ちょっとわかんないですね」というと先生が助言してくれたり。(修士論文発表会のときは)自分が答えている間の先生の顔色を見て、ちょっと違っているのかなと思ったり。あとこの最後(「なんとなくこれかなという答えが浮かんでも確実じゃなきゃ答えない」)のも教授って知識があるじゃないですか。自分の微妙な知識で答えても反論されるというか、っていうのがあるんで、なんか答えられないっていうか。ま、それだと、「考えながら、助言を待つ」とか「笑ってごまかす」というのにつながる感じですかね、「ん、ん」みたいな。】

クラスター2は、「言葉が出てこない」～「赤面すると恥ずかしい」の5項目：【発表全体に対して、言えること。どの場面でも。学会であっても。学内の発表であっても。(略)沈黙とか続くと、んふ、結構大勢いらっしゃるので、自分としても嫌な気持ちになるので。わかんない質問されてもとりあえず答えようと思うんですけど、緊張してたり、焦ったりして、思うように言葉が出てこなかったり、言葉が出てこなくても頑張っちゃべろうとすると、もう混乱して何をしゃべったりしてるのかわかんなくなったりみたいな。】

クラスター3は、「学会によって質問傾向が違っていて難しい」～「相手にわかりやすく伝えることが難しい」：【発表するにあたっての自分が注意している点というか。来たら嫌なものっていう感じですかね。】学会による質問傾向について補則を求めると、【学校の中ですと、先生とか(実験の)反応の中身とかメカニズムについて聞いてくるんですけど、学会での発表ですと、相手が企業さんの方が多く、「それをビジネスするにはどうしたらいいか」とか、「製品を作るにあたって、やっぱりそういう反応が起きちゃったりしてるんですか」みたいな、そういうちょっと違うような気がしますね。】と答えた。

クラスター間の比較：

【クラスター1とクラスター2の共通する点は、難しい質問、わからない質問が来たとき。クラスター1とクラスター3の異なる点は、対象というか相手。こっち(クラスター3)も先生というイメージがあるんですけど、こっち(クラスター3)は学会の聴衆。ク

ラスター1は先生。】

筆者によるJ2についての総合的解釈：

クラスター1は、公の発表として学内での発表がイメージされており、そこにいる顔を知っている教員の知識の豊富さ・正確さには太刀打ちできないとの思いから回答はあえてせずに教員の反応を待つ「発表における他者に依存した回答態度」がうかがえる。それについて本人は、すべてをプラスの項目と評価している点が注目される。下手に回答して、反論されるよりは、教員に誘導してもらえよう、「考えているふり」「笑ってごまかす」といったあいまいな非言語コミュニケーションの形を選択している。さらに、思い浮かぶ回答があっても、外れているときのことを考えてか、確実にできればそれを口にするのではなく、「自分にとってはマイナスにもならない」ので、プラスと評価している。依存が許される環境であると本人が認識する環境においては、自らが発言することで不利な立ち場になることを非常に嫌い、意識していることがわかる。

クラスター2は学内・学外を問わず、質問に対し、どうにか一人で対応しなければと焦るときの緊張した身体的反応が述べられており、これは「焦燥時の身体の反応」である。

クラスター3は、学会による質問傾向の違いや、自らが回答する際の心境が述べられており、「場面や相手の関心に応じた対応への戸惑い」が示されている。

全体として、J2のクラスターは、学内・学外とによるクラスターと、緊張時の身体の反応からなる。学外での質疑応答には、質問傾向の多様さや説明の難しさを挙げているのに対し、聴衆や質問者とある程度の関係が構築されている状況においては、相手への依存する態度が複数あげられており、J2の過度の依頼心がうかがえる。

3. 2. 3 日本人学生J1及びJ2のまとめ

J1は、質問を受けた回答前の反応と、回答時の態度とからなるクラスターを構成しており、発表内容に関して最も詳しく知る者として、専門家もいる公の場でどう回答するべきかに強い意識がある。それゆえに、応答した後の回答内容への不安や、簡単な質問も自ら難しくするといった負の体験をすることもあるのであろう。

J2は、学会等での学外での発表をイメージしたクラスターでは、J1同様に質問者へのわかりやすい説明の仕方や想定外の質問等、企業等からの質問も含めた幅広い内容への対応についての難しさを述べており、J1と共通する点も見られた。しかしながら、特に学内での発表において、不明な点は、聴衆、特に、教員の力を借りて解決しようという態度が非常に特徴的である。これは教員との関係がある程度作られていることが前提であり、その上でのJ2の甘えと見ることができよう。また、質問に対する回答が想起されても確信度が高くなければ回答しないという態度から、公の場で発言することに対する非常に慎重な姿勢がうかがえ、そのことが学内の発表においてはある程度関係が構築されている教員への依存する態度につながってしまっているように推察される。

4. 総合的考察

個々の特徴については前章でまとめたので省略するが、外国人留学生F1、F2の質疑応答に対する意識・態度を日本人学生J1、J2と比べてみると、F1、F2に特有なものとして挙げられるのは、以下の2点である。

1つ目はやはり日本語の理解・運用に対する意識・態度である。特に、日本語能力が一定程度高くない時期においては、質問者の質問内容そのものを理解することができず、質疑応答は全く成立しない。また、質問者の質問内容が理解できた場合でも、外国人留学生の応答が質問者に理解できなければこれもまた質疑応答は成立しない。この状況で外国人留学生が発表に臨む心境は暗い闇そのものであろう。

そして、理解・運用には大きな問題が見られなくなった段階でも、必要なときに言いたい日本語、研究上、必要な専門用語が出てこないといった、動転・焦りを想起させる状況も見られる。

さらには、方言（本稿では関西弁）の問題があることもわかった。これは誰もが経験する問題とは言い難く、F1が言うように相手の質問内容が理解できれば済む問題である。大学には日本各地から教員が集まっており、また学会等においても発表においては共通語が使用されても質疑の日本語は一樣でないことが推察され、方言にも外国人留学生は直面し、対応を考えていることがわかった。

また、F2が用いていた「検討します」や「今後の課題とさせていただきます」といった、ある種の機能を持つ定型表現は、研究室の先輩の発表を見て学ぶ場合が多い。しかし、F2の発言からは、「検討します」は対話を終了させる便利な方略と安易に解釈している様子もうかがわれ、不適切なインタラクションである場合も考えられる。ある種の機能を持つ表現については場面の中での適切な指導の必要性を考えさせられた。

2つ目は、研究に対する責任の認識や、研究を発展させたビジネスとの関わりに関した意識が特に表明されていなかったことである。当該研究に関わった中心人物として、聴衆の前で説明することは、J1が「自分が言ったことが真実になるじゃないですか。これ、専門の先生に対してはよりですけど、普通の人に対しては「これ、合ってるのか」っていうのがありますね。」と述べているように、自分が説明したことが他の大学や企業の研究にも影響していくという社会的な関与への意識はF1、F2には見られなかった。

他方、外国人留学生と日本人学生において共通する意識・態度には以下の2点が挙げられる。

1つ目は、発表である学生が向き合う聴衆、特に、質問者側に立つ「先生」との関係である。専門家である「先生」に対し、自分の意見を述べることへの躊躇や遠慮が見られ、質疑応答の相互行為を自ら打ち切る（F2）、依存する（J2）、存在を意識して答えづらい（J1）といった意識・態度に繋がっている。これは、「先生」は知識豊富な人物で、自分の考えを言ったところで、さらに追究されれば太刀打ちできないといった、教員を追い込む存在として見ていることが推察される。「先生」と「学生」との日本あるいはアジア独特の人間関係が影響し、自分の意見や考えを述べてみようとする意識は学生自身の中にあまり存在していないように思われる。この点については、質疑応答が自己の内省や新たな視点の構築に役立つといった肯定的側面をより指導者側が理解させる必要がある。

2つ目は相手にわかりやすく、的確に答えるという点である。外国人留学生の場合は、日本語使用も加味されるため、日本人学生が抱える問題より複雑で多岐にわたると思われるが、外国人留学生だけが抱える難しさではないことが示唆された。

以上、外国人留学生2例を日本人学生2例と比べ、異なる特徴、及び、共通する特徴をまとめた。少ない事例での分析結果であるため、これをもって一般論とすることはできな

いが、外国人留学生の特徴が浮き彫りとなった。

5. おわりに

本稿では、留学生の口頭発表の質疑応答に関する意識・態度を把握することを目的に、外国人留学生2名と日本人学生2名に「個」に焦点をあてたPAC分析を用い、調査・分析した。その結果、質疑応答に対する捉え方は、同じ群であってもそれぞれ異なっており、各自が内面に持つ意識・態度の多様な面が明らかとなった。さらに、外国人留学生の共通する特徴を明らかにするために、日本人学生の特徴と比較したところ、留学生には、日本語に関して、受容と産出の両面での日本語力の保持、動転したことによる日本語の忘却、機能的表現の不適切使用、方言の聞き取り対応といった留意すべき点が見られることが明らかとなった。一方で、研究を社会との関わりから捉える視点は、外国人留学生には見られなかった。また、共通する点としては、教員と学生との関係から生ずる躊躇や遠慮、わかりやすく説明することに難しさを感じる点があることがわかった。

今回は留学生自身の意識にもとづき、質疑応答についての困難点を分析したが、今後はこのような認識を踏まえ、実際の口頭発表の場でデータを収集し、質問者との相互行為における困難点について分析・検討を進めていきたいと考える。

謝辞 本研究はJSPS科研費 課題番号23520609の助成を受けた研究の一部である。

参考文献

- 1) 徳井厚子・榎本智子 (2006) 『対人関係構築のためのコミュニケーション入門』, ひつじ書房
- 2) 船橋瑞貴 (2010) 「口頭発表における挿入注釈」『2010年度日本語教育学会春季大会予稿集』, pp. 121-126.
- 3) 国吉ニルソン・林洋子・野口ジュディー・東條加寿子 (2007) 「日本語と英語による工学系口頭発表コーパスの構築と解析—オンライン検索サイトの開発に向けて—」『信学技報』, 第30号, pp. 7-12.
- 4) 水野マリ子 (2010) 「日本語上級・超級留学生の口頭発表能力に関する一考察—修士課程の留学生について—」『神戸大学留学生センター紀要』 16, pp. 49-57.
- 5) 仁科浩美 (2007) 「理工系修士論文発表会における質疑の視点と表現方法」『専門日本語教育研究』 9, pp. 23-30.
- 6) 仁科浩美 (2012) 「日本人学生が口頭発表時の質疑応答において感じる困難点 —刺激回想法を用いた日本人大学院生への調査—」『研究発表予稿集 第1分冊』, 日本語教育国際研究大会名古屋2012, p. 33.
- 7) 金孝卿 (2006) 「研究発表の演習授業における『質疑・応答』活動の可能性 —発表の内容面に対する『内省』の促進という観点から—」『世界の日本語教育』 16, pp. 89-105.
- 8) 内藤哲雄 (2009) 『PAC分析実施法入門 改訂版: 個を科学する新技法への招待』 ナカニシヤ出版

Summary

NISHINA, Hiromi :
International Students' Consciousness and Attitudes
toward Question and Answer Sessions:
A Qualitative Analysis Based on
Comparison with Japanese Students

This paper analyzes international students' consciousness and attitudes toward question and answer sessions in the field of Science and Engineering, comparing the results qualitatively with Japanese students through Personal Attitude Construct (PAC) Analysis.

As a result, it can be seen that even with the same group of international students, different reactions are observed. In one case, a student divided the factors of his difficulties into Japanese language comprehension and understanding of technical content based on the chronological time scale of his stay in Japan. In another case, a student realized his own mistake or inability to reply and "give up" his chance to answer in fear of rebuttal or complexifying the situation.

In comparison with Japanese students, it can be observed in common with international students, that they are conscious of professors' presence, and thus hesitate or feel anxious when answering. In addition, both Japanese and international students stated that they feel it is difficult to present an accessible explanation.

On the other hand, the following features were observed to be specific to international students: 1) international students are conscious toward their ability of reception and production, such as getting nervous and forgetting Japanese or being unable to understand dialects; 2) international students did not indicate whether they are conscious towards the impact of their research on society or not.

International Exchange Center, Graduate School of Science and Engineering,